

# 女子短期大学生における学校生活の機能について

—通学理由と学校生活に対する満足度の分析を中心として—

飛 田 操

## The Perceived Function of the Junior College Life:

—An Analysis of the Reason for Why Attending the College  
and the Satisfaction with the College Life.—

Misao Hida

The main purpose of this study was to clarify the structure of the functions of college perceived by the female college students.

The questionnaire asked (1) the reason for why they had been attending the college, (2) the satisfaction with the college life, (3) the perceived relationship between the student and the teachers. One hundred and forty-five female junior college students responded the questionnaire.

The main results were as follows;

- (1) Factor analysis of the reason for attending school showed there found three dimensions called "instrumentality of the college," "workingness of the college," and "friendship at the college."
- (2) Multiple regression analysis showed that both the "workingness of the college" and the "friendship at the college" positively influenced the satisfaction with the college life.
- (3) The students more satisfied with the college life as they perceived more the teachers' considerative behavior.

### 問 題

本研究の目的は、短期大学に在籍する女子を対象として、短期大学生活に対する満足度を、短期大学への通学理由と、教師からの学生への働きかけの認知との関連から検討することにある。義務教育である小・中学校に対

して、基本的には、本人の自発的意志に基づく短期大学への通学に関しては、様々な通学の理由の側面が存在すると考えられる。そして、この通学理由についての認知を分析することによって、短期大学の機能を学生がどのようにとらえているかを明らかにすることができると思われるからである。ここで、い

わゆる短期大学の入学志望動機ではなく、通学理由についての認知を取り扱ったのは、進学希望者が「短期大学にどのような機能を期待するか」、あるいは、「短期大学はどのような機能を有していると予想するか」ではなく、実際に短期大学に通学している学生が「短期大学はどのような機能を有していると認知しているか」という問題を検討しようとするためである。

これまで、大学を含めた学校の機能として、例えば、児島(1977)は、新堀通也の考察を基に、1. 社会の文化を社会の新しい成員に組織的に伝達する保守的機能と、社会の現状を打破し、既製の文化を超える改革を生み出す革新的機能、2. 社会の生産活動とは無縁な場としての消費的機能と、人材開発や科学技術の振興にとって不可欠な場としての生産的機能、3. 社会の統合、統一をもたらそうとする統合的機能と、社会の各種各様の地位や役割に対して、人々を選別し、それにふさわしい知識や技能を与えて配分する分化的機能があることを示している。しかし、この分類は、あくまでも教育的・社会的な視点からみた理念的なものであって、この分類がそのまま実際にどのような機能をはたすものとして学生が学校や学校生活をみているかということには直接該当しないであろう。

例えば、Clark(1962)は、アメリカの大学での学生文化の考察に基づき、アメリカの大学生には、大学との同一視をしていて、知識との関与が高い「学問指向型」、大学との同一視はしていないが、知識との関与が高い「非同調者型」、大学との同一視をしているが、知識との関与が低い「楽しみ派型」、大学との同一視をしていなく、知識との関与も低い「職業指向型」という4種類のタイプがあることを示している。このことは、「非同調者型」はともかく、アメリカの大学生は、新しい知識や技術を習得する場としてだけでなく、就職のための手段として、あるいは、自分の趣味や友人との交流を深める場としても大学や大学生活をみなしていることを示すものであ

ろう。

また、総理府青少年対策本部(1984)は、学校を卒業した青少年に対して、学校でどのようなことを学んだり、経験したりしたかという調査を実施している。そこでの質問項目は、「専門的な知識を身につけた」、「職業的技能を身につけた」、「一般的・基礎的知識を身につけた」、「自分の技能をみつけ出し、それを伸ばすことができた」、「友人と深い友情で結ばれた」、「自由な時間を楽しむことができた」というものであり、このことは、一般的・基礎的か専門的かどうかにかかわらず、「知識や技術を身につける」場として、そしてまた、「友人との交流を深め」たり、「自由な時間を楽しむ」場としても学校が機能していることを暗黙裏に仮定していることを示すものといえよう。

一方、大学生活に対する満足度に関しては、これまで、志望動機や進学の決定時期などとの関連からこれが検討されることが多かった(例えば、柏木・渡辺, 1980)。この視点は進路指導上かかせないものであり、また、確かに、入学当初の学生にとっては、志望どおりの大学に入学できたかどうかといったことや、進路の決定過程が入学後の学校生活に対する満足度に大きな影響を与えることは事実であるとしても(岨中, 1975)、大学生活が進行していくうちに、これらの要因が満足度に及ぼす影響は減少していくのではないだろうか。むしろ、親しい友人ができたかどうかや、学校が自分の能力を存分に発揮できる場であるかどうか、あるいは、学校の先生との交流ができるかどうかといった要因が相対的に重要な影響をもつようになると考えられるのである。

例えば、総理府青少年対策本部(1984)が青少年に実施した「学校生活に対する満足度」についての調査では、学校生活に満足と感じている学生が、日本では「満足」と「やや満足」を合計したもので65.2パーセント、不満を感じているものが「不満」と「やや不満」の合計で31.5パーセントという値を示し

ているが、ここでは、「不満」や「やや不満」の理由として、「授業のし方が気に入らないから」、「施設や設備が十分でないから」、「よい先生に恵まれないから」「進学・就職の指導が適切でないから」などが上位に挙げられている。このことは、「施設・設備」といった環境的な問題とともに、「授業のし方」、「よい先生」、「進学・就職の指導」といった学校の教師とのかかわりあい方という対人的な問題も学校生活に対する満足度や不満度に大きな影響を与えていることを示すものであろう。従来、これらの問題は、小・中・高校生を対象として検討されることが多かった（例えば、佐藤，1982，1987）。しかし、大学や短期大学の学生にとっても大学教師とのかかわりあいかたという対人的な問題が学校生活に対する満足度に大きな影響を与えたと考えられるのである（黒川，1987参照）。

以上、本研究の基本的な位置づけについて述べてきた。ここで、具体的に検討されるのは、以下の3点である。

1. 短期大学への通学理由の構造を分析することにより、認知的なレベルで短期大学の機能を学生がどのようにとらえているかを明らかにする。
2. 短期大学への通学理由、すなわち、認知的なレベルでの短期大学の機能の位置づけのしかたと、学校生活に対する満足度との関連を吟味する。
3. 短期大学の教師とのかかわりかたのひとつとして、短期大学の教員からの働きかけの認知をとりあげ、この教師からの働きかけの認知と学校生活に対する満足度との関連を吟味する。

## 方 法

**質問紙の構成** 質問紙は、①調査対象の年齢、自宅通学か寮生活かの区別、大学公認のクラブ・サークルへの所属の有無を問うフェイス・シート、②短期大学への通学理由を問う10項目、③短期大学の教師からの働きかけについての認知を問う7項目、および、④短期大

学生活に対する満足度を問う8項目から構成されている。②～④の項目は、すべて、全くあてはまらない(1)～非常にあてはまる(5)の5段階評定尺度である。

**調査対象・方法** 質問紙は、1988年6月私立女子短期大学2年生147名に対して、授業時に集団で施行された。このうち、回答に不備のあった2名をのぞき、145名（平均年齢19.22歳：範囲19-22歳）のデータが分析の対象とされた。

## 結 果

**調査対象について** 調査対象のうち、自宅から短期大学に通学しているいわゆる自宅通学者は127名（87.6%）、大学の寮で生活している者は18名（12.4%）であった<sup>1</sup>。また、大学公認のクラブ・サークルに所属しているものは51名（35.2%）であった。

**通学理由について** 通学理由を問う10項目を因子分析（主因子法・Varimax回転）したところ、3因子が得られた<sup>2</sup>。回転後の因子負荷量を表1に示す。第一因子は、「新しい知識や技能を身につけることができるから」、「いろいろな資格がとれるから」、「就職や結婚に有利だから」の3項目に高い正の因子負荷量を示すもので、知識や資格を獲得するための道具、あるいは有利な就職や結婚をするための手段として短期大学を位置づけたときの通学理由の側面であると考えられる。ここではこれを「短期大学の道具性」の因子と呼び、この3項目の単純加算点をもってその得点の指標とする。

第二因子は、「授業がおもしろいから」、「大学が好きだから」の2項目に高い正の、「こないと単位がとれないから」に高い負の負荷量を示すもので、ここではこれを「短期大学の学業性」の因子と呼び、「こないと単位がとれないから」を逆転項目とし、この3項目の単純加算点をもってその得点の指標とする。

また、第三因子は、「友人とおしゃべりや情報交換ができるから」、「新しい友人がで

きるから」, 「こないと先生方や友人が心配するから」, 「家や寮にいてもつまらないから」の4項目に高い正の負荷量を示している。これらは、短期大学内での友人との関係を示していると考えられよう。ここではこれを「短期大学の友人関係性」の因子と呼び、この4項目の単純加算点をもってその得点の指標とする。

表1 通学理由に対する因子分析

項 目	因 子		
	1	2	3
1 新しい知識や技能を身につけることができるから	.65	.25	.23
5 いろいろな資格がとれるから	.59	.29	.26
2 就職や結婚に有利だから	.56	.02	-.01
6 授業がおもしろいから	.18	.88	.15
9 大学が好きだから	.13	.58	.26
8 こないと単位がとれないから	-.03	-.44	.24
7 友人とおしゃべりや情報交換ができるから	.31	-.18	.68
4 新しい友人ができるから	.53	-.09	.56
10 こないと先生方や友人が心配するから	.12	.15	.43
3 家や寮にいてもつまらないから	-.00	.08	.41
絶対寄与率	15.26	15.21	13.97

教師からの働きかけの認知について 教師からの働きかけの認知を問う7項目を因子分析した結果、単一の因子が得られた。この7項目は、「学校の先生方は私の立場を理解してくれる」、「学校の先生方は困ったときすぐに相談ののってくれる」、「学校の先生方は学生みんなを平等にあつまっている」、「学校の先生方は生活について適切な指導をしてくれる」、「私はこの学校の先生方から認められている」、「この学校の先生方は私の言うことをよくきいてくれる」、「この学校の先生方は勉強のやり方を指示してくれる」というもので、これらは、教師の学生への「配慮性」を示すものと考えられる。具体的には、自分自身が単に学生の一人としてではなく、個としての意志と考えをもった独自の存在として教師から認められているかどうか、という認知の側面を示しているように思われる。ここでは、この7項目の単純加算点をもって

その得点の指標とする。

短期大学生活に対する満足度について 短期大学生活に対する満足度を問う8項目を因子分析した結果、単一の因子が得られた。この8項目は、「私はこの学校生活に満足している」、「この学校生活は楽しい」、「私はこの学校を他の人に自慢できる」、「私はこの学校に入学してよかったと思っている」、「この学校では私の思いどおりに行動することができる」、「この学校では私の能力を存分に発揮できる」、「この学校では私はイキイキしている」、「この学校が好きである」というものであり、この8項目の単純加算点をもって学校生活に対する満足度得点の指標とする。

生活形態とクラブ参加の効果について 自宅通学か寮生活かという生活形態の違いによって、また、クラブ・サークルに参加しているかどうかによって、通学理由・学校生活への満足度・教師からの働きかけの認知が異なるかどうか検討した。結果を表2と表3に示した。生活形態による差異は、寮生活者のサンプルが少ないこともあって、参考的なデータであるが、すべてに対して、自宅通学者と寮生活者の平均値のあいだに有意差は認められていない(表2)。

また、大学公認のクラブ・サークルに加入している者と加入していない者のあいだの平均値の差を検討した結果(表3)、通学理由としての「短期大学の友人関係性」においてだけ、有意差が認められ、クラブ・サークルに加入している者のほうが、非加入の者よりも有意に高く「短期大学の友人関係性」を位置づけていることが示されている( $t = -1.98$ ,  $df = 143$ ,  $p < .05$ )。

学校生活に対する満足度と通学理由・教師からの働きかけの認知との関連について ここでは、学校生活に対する満足度と通学理由・教師からの働きかけの認知との関連が吟味される。

第一に、短期大学をどのように位置づけているか、その位置づけの仕方、すなわち、通

表2 通学理由・学校生活満足度・教師からの働きかけの認知におよぼす通学形態の効果

	自 通 学 者 (N=127)	宅 寮 生 活 者 (N=18)	t
通学理由			
「短期大学の道具性」	10.23	9.78	0.63
「短期大学の学業性」	6.73	5.83	1.43
「短期大学の友人関係性」	13.57	13.22	0.48
学校生活に対する満足度	18.43	16.61	1.04
教師からの働きかけ	16.70	14.56	1.45

表3 通学理由・学校生活満足度・教師からの働きかけの認知におよぼすクラブ・サークル参加の有無の効果

	ク ラ ブ 加 入 者 (N=51)	ク ラ ブ 非 加 入 者 (N=94)	t
通学理由			
「短期大学の道具性」	10.22	10.15	-0.13
「短期大学の学業性」	6.47	6.70	0.53
「短期大学の友人関係性」	14.18	13.18	-1.98*
学校生活に対する満足度	18.71	17.94	-0.64
教師からの働きかけ	16.49	16.40	-0.08

\* $p < .05$

学理由へのウェイトが学校生活に対する満足度に及ぼす効果を検討するために、学校生活に対する満足度を目的変数とし、通学理由の3つの側面における得点を説明変数とする重回帰分析を行った。標準化偏回帰係数と重相関係数を表4(モデル1)に示す。その結果、有意な重回帰式が得られ( $R = .70, p < .001$ )、「短期大学の学業性」と「短期大学の友人関係性」の標準化偏回帰係数が有意な正の効果を示している(各々、 $\beta = .63, p < .001$ ;  $\beta = .19, p < .01$ )。これは、「短期大学の学業性」を高く位置づけているほど、また、「短期大学の友人関係性」を高く位置づけているほど、学校生活に対する満足度が大きくなることを示すものである。

また、学校生活に対する満足度と教師からの働きかけの認知との関連を検討するために、学校生活に対する満足度を目的変数、通学理由の3つの側面と、教師からの働きかけの認知を説明変数とする重回帰分析を行った(表4, モデル2)。その結果、有意な重回帰式が得られ( $R = .82, p < .001$ )。「短期大学

表4 重回帰分析の結果

説明変数	モデル1 $\beta$	モデル2 $\beta$
「短期大学の道具性」	.07	.02
「短期大学の学業性」	.63 ****	.30 ****
「短期大学の友人関係性」	.19 **	.15 ***
「教師からの働きかけ」	...	.55 ****
重相関係数	.70 ****	.82 ****

\*\* $p < .01$ ; \*\*\* $p < .005$ ; \*\*\*\* $p < .001$

の学業性」、「短期大学の友人関係性」と「教師からの働きかけ」の標準化偏回帰係数が有意となっている(各々、 $\beta = .30, p < .001$ ;  $\beta = .15, p < .005$ ;  $\beta = .55, p < .001$ )。このことは、「短期大学の学業性」や「短期大学の友人関係性」を多く位置づけているほど学校生活に対する満足度は高まると同時に、「教師からの働きかけ」すなわち一種の「配慮性」を多く認知するほど、学校生活に対する満足度が高まることを示している<sup>3</sup>。

## 考 察

ここでは、女子短期大学生を対象として、大学生活に対する満足度を大学への通学理由と教師からの働きかけの認知との関連から検討した。その結果、次の点が明らかになった。

通学理由に対する因子分析の結果、「短期大学の道具性」、「短期大学の学業性」、「短期大学の友人関係性」という3つの独立した因子が見いだされた。これは、知識や技術の獲得の場としてだけではなく、就職や結婚のための道具としてや、新しい友人を獲得したり、従来の友人との交流を深める場としても短期大学を位置づけていることを示していると考えられよう。この3因子は、Clark(1972)の「職業指向型」、「学問指向型」、「楽しみ派型」という分類にそれぞれ対応するものとして考えられる。

そして、このことは、「通学理由」を分析することによっても、少なくとも認知レベルでの短期大学の機能を解明することができるとを示唆するものであり、従来、理念的な分類が中心であった学校の機能についての研究に対して、方法論的にも新しい視点を提供

するものであるといえよう。

クラブ・サークル所属の有無と通学理由や学校生活に対する満足度との関連を検討した結果、通学理由としての「短期大学の友人関係性」においてだけ、クラブ・サークルに所属しているもののほうが、所属していないものよりも有意に高く「友人関係性」を位置づけていることが示された(表3)。これは、学生にとってクラブやサークルが、親しい友人を得たり、友人との交流を深めたりする場として機能していることを示唆するものである。

また、主として通学理由と学校生活に対する満足度との関連を検討した結果、「短期大学の学業性」と「短期大学の友人関係性」が学校生活に対する満足度に大きな影響を与えていることが明らかになった(表4)。このことは、短期大学の機能として「学業性」を高く位置づけているほど、また、「友人関係性」を高く位置づけているほど、学校生活に対する満足度が高まることを示している。

ここでは、「短期大学の道具性」の効果は認められていないが、あるいは、本調査が実際に就職活動を学生が積極的に試みる以前の時点でなされたために、就職に対する「道具」としての短期大学の機能がそれほど顕著なものとして認知されていなかったのかもしれない<sup>4</sup>。今後、入学直後から卒業以降までを追跡する継続的な研究が必要であろう。

ところで、飛田(投稿中)は、対人関係において、その他者からなんらかの機能を提供されることばかりだけでなく、自分もその他者に機能を提供することができることを認知することも、その関係に対する満足度に大きな影響を与えていることを示している(飛田, 1987a, 1987b, 1987c参照)。この結果は、他者が自分にとってかけがえのない存在であると認知することばかりでなく、自分もその他者にとってかけがえのない存在であると認知されることも、その他者との関係を形成したり維持していくうえで重要な役割を演じていることを示していると考えられる。本調

査の結果、教師からの働きかけ、すなわち、一種の「配慮性」を多く認知するほど、学校生活に対する満足度が高まることが示されている(表4および注3)。これは、教師を中心とした学校当局からも、自分自身の存在が認められ、かけがえのないものであるとしてみなされていると認知されえるかどうか、その学校生活に対する満足度に大きな影響を与えていることを示しているとは考えられないであろうか。そして、学生は、「意見や提言を真剣に聞く」、「質問にきちんと答える」といったことだけでなく、「必要なときには遠慮せずに叱る」ことをも指導教官に強く期待しているという黒川(1987)の結果は、この解釈に対するひとつの傍証であると考えられるのである。

確かに、「学生を満足させる」ことだけが、大学教員の唯一の使命であるとは考えられない。しかし、「友人との交流を深める」こととともに、「面白い授業がうけられる」こと、そして、「かけがえのない個としての存在として教師から認められる」ことが学校生活に対する短期大学生の満足度を高めるという本調査の結果は、大学の教員にとっても学生に対するかわりかたについての一つの方向を示しているように思われるのである。

#### 「注記」

1. 調査対象の短期大学では、自宅通学者以外はすべて、原則として寮生活をする事になっている。
2. 計算はすべて文教大学電算室のSPSSXプログラム・パッケージを使用した。
3. 教師からの働きかけの認知と学校生活に対する満足度との単純相関は、.77であり、0.1パーセント水準で有意であった。
4. 本調査は、6月に実施されたが、調査対象の学生が実際に積極的に就職活動を開始したのは8月下旬から9月上旬にかけてであった。

#### 引用文献

- Clark, B.C. 1962 *Educating the expect society*. 210, Chandler.

- 飛田操 1987a 女子大生における友人関係の機能 日本グループ・ダイナミックス学会第35回大会発表論文集, 59-60.
- 飛田操 1987b 女子大生における両親の機能について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 630-631.
- 飛田操 1987c 女子短期大学生からみた父母関係の機能 文教大学人間科学研究, 9, 23-30.
- 飛田操 (投稿中) 女子短期大学生における対人関係の機能について 教育心理学研究
- 柏木恵子・渡辺恵子 1980 現代の発達課題 — 青年心理学 — 八千代出版
- 岨中達 1975 進学志望大学の決定過程と入学後の満足度Ⅱ 京都大学学生懇話室紀要, 5, 76
- 99.
- 児島邦宏 1977 学校 依田新監修 新・教育心理学事典 金子書房
- 黒川正流 1987 教師のリーダーシップ(B) — 大学の場合 三隅二不二監修 現代社会心理学 有斐閣 Pp. 449-461.
- 佐藤静一 1982 教師のリーダーシップ サイコロジー, 25, 42-49.
- 佐藤静一 1987 教師のリーダーシップ(A) 三隅二不二監修 現代社会心理学 有斐閣 Pp.434-448.
- 総理府青少年対策本部編 1984 世界の青年との比較からみた日本の青年 — 世界青年意識調査 (第3回) 報告書 — 大蔵省印刷局